

オンラインゼミの実践と課題

「学問による人間形成」に向けて

勝浦 信幸 †

1 COVID-19 前のフレッシュマン セミナー

例年、勝浦フレッシュマンセミナー（前期：以下「FS」という。）では、学年を越えた仲間づくりと自分発見を主な目標としている。「誰一人取り残さないチームワーク」の構築が、その後のゼミ活動に、そして学生生活・人生に不可欠だと思うからである。

昨年度までは、5月初旬に新入生を対象とした1泊2日のゼミ合宿を行ってきた。この合宿には2・3年ゼミ生も数人が参加してくれている。

初日は様々なグループワークと夜の「しゃべり場」、2日目は体育館を借り切ってバレーボール、バスケット、ドッジボールなどで汗を流すというのが恒例だ。寝食をともにすることが1年生同士だけでなく教員や先輩たちを含めた相互理解に有益であることを実感している。

また、学内での講義時間のグループワークとは別に、講義時間外での学外活動も2～4年生とともに積極的に取り組んできた。NPO・自治体との協働で緑のカーテン苗の配布活動、様々なイベントでの小児がん対策寄付集めのためのアレックスのレモネードスタンド出店、市民の森などでのプレイパークサポート、地域の夏まつりサポート準備などである。

これらの学年を超えた学外での活動や地域

の大人たちとの交流は、自信や意欲につながり、その後の学生生活にも大きく影響する。他者と関わる多くの機会を提供することも重要である（勝浦 2019）。

2 ゼミ開始前の準備

2.1 いち早く全員と繋がる！

COVID-19 禍の今年度は、とにかく新1年ゼミ生全員と早く繋がることが重要と考えた。ショートメール、Webclass などあらゆる手法で、LINE の QR コードも駆使しながら、4/29 までに1年生全員と LINE で繋がることのできた（LINE なら全員が使い慣れているはず）。翌日には、1年ゼミ生全員の LINE グループが完成し、先輩たちのいるゼミ全体 LINE グループにも全員参加となった。

これにより、ゼミ以外の大学全体についての様々な質問が、教員や先輩に寄せられることになった。新入生がいかにか不安を抱えているか、先輩たちも身をもって知ることになった。

2.2 合同ゼミ

地域連携 PBL に取り組んでいる勝浦ゼミにとって、COVID-19 禍での様々なイベントの中止、外出自粛、行動制限は、大きな壁となっている。とはいえ、学年を超えた交流（合同ゼミ）は、できるだけ早い時期に行うことこそが有効である。3年ゼミ生からの提案で5/3(日)の午後 Zoom を使用して通信確認を兼ねた1年生か

ら4年生までの合同ゼミを開催することになった。2年～4年のゼミ生は、すでにそれぞれ2回のZoomによるゼミ（授業外）を経験しているので、新1年生への操作上のフォローをお願いした。

5/3の合同ゼミには新入生全員を含む52人が参加した。新入生からは、Webclassの使い方、教科書の取得方法、先輩が推薦する科目・推薦しない科目、部活やサークルの情報など幅広い質問が、先輩たちに投げかけられていた。新入生にとっては情報が圧倒的に足りていないことが上級生たちにも伝わった。合同ゼミは、ゼミ全体のLINEグループでの学年を越えた繋がりのきっかけにもなった（先輩からの情報が重要）。

授業開始直前まで、LINEグループを活用して、Webclass、Zoom、Teamsなどの使い方の基本をある程度共有することができた。

3 今年度前期のFS

3.1 まずは慣れること

1年生は、大学に通うことなく、友達、先輩と情報交換することもままならない。そのような中、新たな対人関係、大学のシステムやルール、さらにはZoom、Teamsなど様々なシステム、そしてレポートのためのWordやExcelの使い方などに、多くのことに慣れていかなければならない。しかも短期間で。

そこで、初回はキャンパスの紹介、自己紹介を、2回目・3回目はアイスブレイキングで楽しい時間になるように心がけた。具体的には、いわゆるバースデーチェーンを口に出して行い、結果を書記担当がチャットに書き出すことやメンバーが18歳の誕生日に住んでいた場所を北から順に並べてそれをチャットに書き出し、その早さを競うことなどである（連想ポー

カーゲームはリアルでないと盛り上がらない）。

この初回から第3回までで、ある程度お互いを知ることができたし、Zoomの使い方にも慣れてくれたと思う。

3.2 聴くこと・話すこと・読むこと・書くこと

例年のようなグループワークや地域連携活動が難しいことから、今年度前期は原点に戻って、特に基礎的な力をつけていくこととした。ゼミ生たちからも同意を得た。

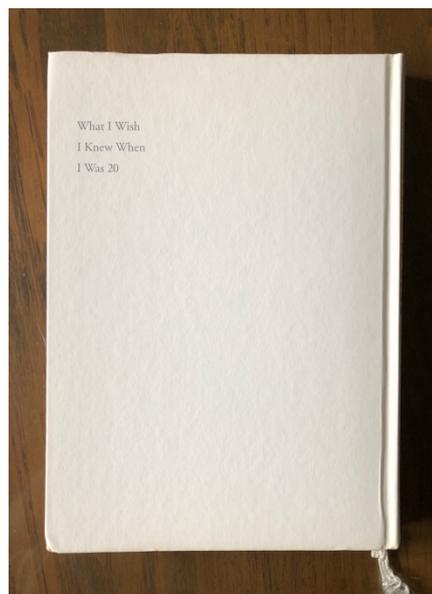
使用するツールはZoomである。テキストは、スタンフォード大学アントレプレナー・センターのティナ・シーリグが書いた次の図書である。

「20歳のときに知っておきたかったこと」

What I Wish

I Knew When

I Was 20



この本は、著者が息子ジョシュへのプレゼントとして書いたもので、10章のそれぞれが1章あたり20～30ページと読みやすくなっている。

また、章名も「第1章 スタンフォード大学の学生売ります」、「第3章 ビキニを着るか、さもなくば死か」など、興味を引くものとなっている。

第3回までのアイスブレイキングの後は、いよいよ第1章からのスタートとなる。

ゼミ生がやることは、以下のとおりである。

① ゼミの日までに1章分を熟読し、共感した部分、印象深いフレーズ、納得できない部分、自分の経験に当てはめてみたことなどをメモしておく（読むこと）。

② ゼミの日には、ブレイクアウトルームにランダムに分かれて、①のメモを参考に、共感できる部分、できない部分、自分だったらという視点で、ディスカッション（会話）を行う（話すこと）。

③ ディスカッションによって他のメンバーの発言などから新たに気づいた点や共感できた部分、そうでない部分などをメモに整理する（聴くこと）。

④ ①と③から1章分まとめ、感想などを記録しておく（書くこと）。

⑤ ①から④を1章から10章まで繰り返す。

10章まで終わったら、本全体の書評（1,000字以上）を書く。

書評の書き方は、たくさんの書評を読んで自分に合うスタイルを見つけることとした。また、書評は夏休みの宿題とした（書くこと）。

4 授業を進めながら感じたこと・

工夫したこと

ゼミ生全員が事前に該当する1章をきちんと読んでメモをしてきていることに驚いた。やるべきことをやってきただけのことではあるが、その真剣さと意欲に初年次教育の重要性とそれを担当する教員の責任の重さを改めて深く認識した。

Zoomでのディスカッションは、ゼミ生全員18人で当日の予定などを確認した後、5人、5

人、4人、4人のブレイクアウトルームに分けた。ゼミ生全員が知り合うために毎回ランダムに割り振った。

初回から3回目までアイスブレイクなどを行ってきたとしても、実際に対面したことがない新入生同士のディスカッションが初めからスムーズに進むはずがない。進行役は自然に決まってスタートはするが、共感できる点や印象深いフレーズなどについてメンバーの発表が一巡すると、その後は沈黙となってしまう。

予想されたことでもあったので、ディスカッションの時間を2分割して、半分は「雑談コーナー」とした。短時間ではあるが、「雑談コーナー」では、アニメ、ゲーム、K-POP、履修科目などの話題で盛り上がっていた。

また、教員がブレイクアウトルームを回りながらディスカッションに加わった。ゼミ生の発言に対して教員が補足や質問をするなど深堀しながら、ゼミ生の積極的な姿勢に対しては褒め称えた。

こうして、テキストの第4章あたりからは、積極的な発言や質疑応答など相互のコミュニケーションができるようになり、会話が弾むようになってきた。そのタイミングで「雑談コーナー」は役割を終えることとなった。

5 ゼミ生たちの声

ゼミ生からの評価としては、テキストに対する声（評価）、Zoomによるオンライン授業に対する声（評価）に分けて記述する。

5.1 テキストに対する評価

学生たちは、テキストに対して高い評価をしている。ネガティブな評価はなかった。

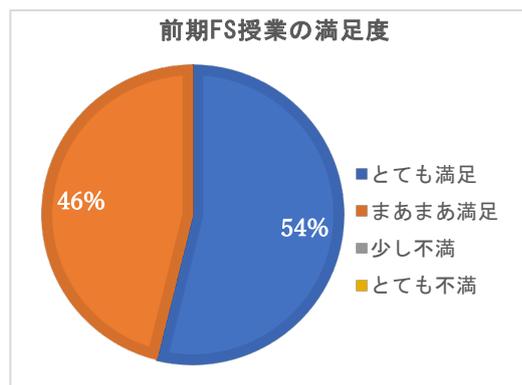
以下のような声（感想）が寄せられている。
・この本を読んで自分の将来を考えることが楽しくなった。

- ・将来の目標ができ、これからたくさんの壁にぶつかっていくことも怖くなくなってきた。
- ・この本のおかげで、一步を踏む出す勇気がもらえた。
- ・まだ将来の夢が見つけられていないが、大学生活でいろいろな体験を繰り返し、多くの選択肢を試して、自分の夢を見つけていきたいと思った。

5.2 Zoomによるオンライン授業に対する評価と考え方

Zoomによるオンライン授業については、夏休み終了直前に Forms を使ってアンケート調査を行った。

1 問目で前期授業の満足度について調査した。その結果は、次のとおりである。



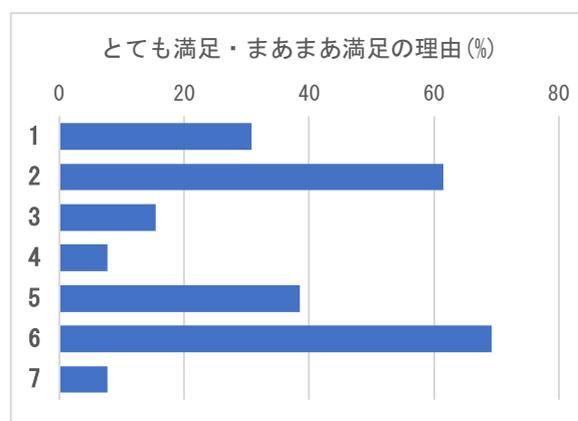
前期授業の満足度については「とても満足」54%、「まあまあ満足」46%で、「少し不満」と「とても不満」との回答はなかった (Forms の機能が影響したと考えられる：回答者の学籍番号と氏名が表示される)。

では、「とても満足」や「まあまあ満足」の理由は何か (「まあまあ満足」の裏には「不満」がある)。

2 問目では、次の 7 つの選択肢からその理由について複数回答してもらった。

- 1 オンラインでも対面式と同様の学習効果があったと思うから
- 2 新型コロナの感染を防げたから
- 3 通学しないですんだから
- 4 オンラインでも大学に入ってから友達ができただから
- 5 自分の自由時間が増えたから
- 6 内容が良かった(面白かった)から
- 7 その他

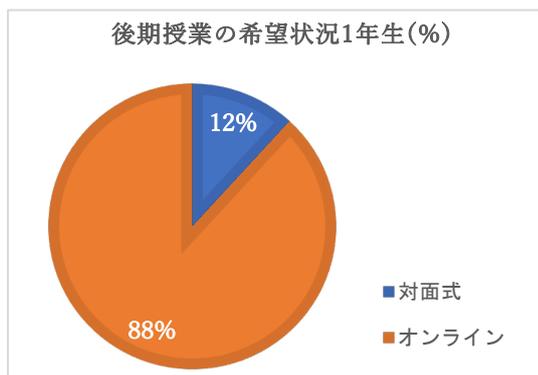
その結果は、次のグラフのとおりである。



前期 FS 授業について「とても満足」「まあまあ満足」とした理由は、6 の「授業の内容」、2 の「新型コロナの感染を防げたから」そして 5 の「自由時間が増えたから」が主なものであった。逆に不満に思っているのは、「友達ができなかったこと」「対面式と同様の学習効果があまりなかった」ということになる。

(1 問目で「やや不満」「とても不満」の回答がなかったので、3 問目で用意した不満の理由を問う選択肢への回答もなかった。)

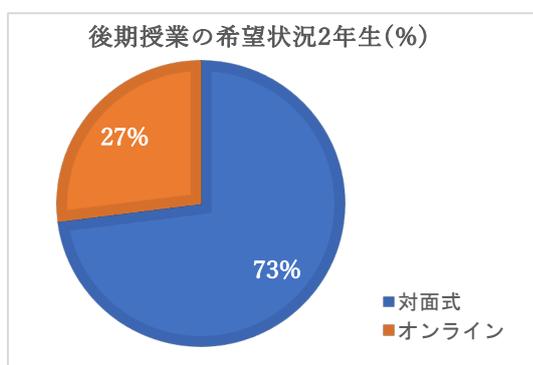
「後期の授業はオンラインがいいか、対面式がいいか」という問いに対しては、次のような回答となった。



結果だけを見ると圧倒的にオンライン希望が多いように見受けられるが、その理由は以下のように様々であった。

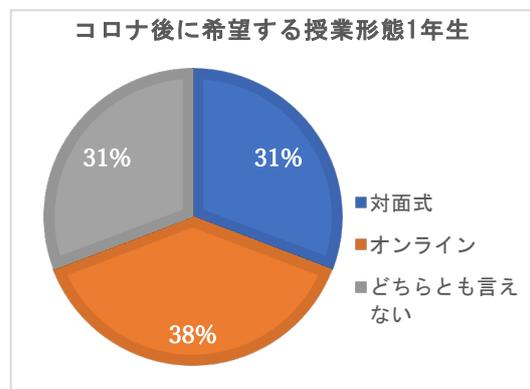
- ・対面式で授業を受けたいが、コロナが心配
- ・前後にオンラインの授業があり、大学でのオンライン受講に不安があるので、間に挟まったゼミも止む無くオンラインを希望
- ・前期を経験して、Zoom オンラインでも対面式と同様に質の高い授業になることがわかった
- ・対面式で受講したかったが、他の科目のほとんどがオンラインのため、諦めた

なお、2年生にも同時期に同様な調査を行ったが、対面式希望とオンライン希望が1年生とは逆転している。



さらに、「新型コロナの感染の心配がなく、他の履修科目のことは考えないとして、本来なら

ばどのような授業形態をゼミに希望するか」との問いに対して、1年生の回答は次のとおりとなった。



1年生は、対面式を希望しているかということでもないということがわかる。大学キャンパスでの対面式授業を経験することなく、前期のオンライン授業にも慣れて不安も払拭された状態では、このままの方がいいと考えるのも無理はないのかもしれない。確かに知識などの学力という点では、対面式もオンラインも遜色がないとも言える。ただ、大学生時代に、特にフレッシュマンに習得してほしい能力の中には、他者との様々な体験を通してでないと思えないものもあると考えるのは筆者だけではないだろう。

6 後期に向けて

後期は、できる限りゼミ生たちの希望に沿うハイブリッド方式で柔軟に対応していきたいと考えている。そして、前期の「聴く・話す・読む・書く」に「調べる」加えて、能力アップを図っていきたい。

授業時間では、次のように進めていく予定である。

- ① 公務員試験などの小論文や就活でのグループディスカッションで頻出される10か

ら 15 の課題をテーマとして掲げる。

- ② ゼミ生たちは、指定されたテーマに対して予め十分に調べた上でディスカッションに参加し、そこでの議論を踏まえて、1,000字程度の論文作成を毎週繰り返す。
- ③ ディスカッション後は、教員が議論のポイントを解説し、モデルとなる小論文はコメントを付して後日共有する。

調べる力、ディスカッション能力、論文作成能力を高めてもらおうというのが狙いである。

また、学年を超えた PBL 活動（合同ゼミ）もできるだけ実施していきたい。恒例となっている「The Young Americans」（主催：NPO 法人じぶん未来クラブ・協力：坂戸実行委員会）への参画をはじめ、11 月のサイエンスアゴラへの出展「SDGs から自分達のゴールを考えるワークショップ」（主催：未来の学びと持続可能な開発・発展研究会）の参加と協力、12 月の「これからの地域・自治体の担い手に必要な SDGs（2030 アジェンダ）」（主催：（一社）地域連携プラットフォーム）への参加・協力をゼミとして進めていく（いずれもオンラインによる）。

7 おわりに

オンライン授業（ゼミ）が学生たち、特に新入生に与えた影響は、思いのほか大きいように思う。「対面しなくていいのなら…登校しなくていいのなら、その方が楽」という安易な発想が拡がることを危惧するのは、筆者だけではないだろう。

建学の精神である「学問による人間形成」が指し示すものは、知識だけでなく、豊かな人間性の育成である。自然に囲まれた坂戸キャンパスは、そのための重要な「場」であるはずだ。

豊かな人間性の育成をオンライン授業のゼミでどう達成していくのか。with コロナ時代の

あるべき大学教育についてはどの大学も模索中のようなのであるが、むしろ、これまでの対面式授業の振り返り、課題を洗い出す中で、ヒントが見つかるかもしれないと考えている。

将来、卒業生たちが「with コロナ世代」「COVID-19 世代」などと揶揄されることなく、むしろ社会からポジティブに捉えられる世代となるようにすべき大きな責任を、教育関係者が背負っている。そういう自覚を常に持ち続けていきたい。

文献など

勝浦信幸（2019）「地域連携 PBL における学修成果の可視化について」『城西大学教職課程センター紀要』3, 45-60

ティナ・シーリグ（2010）『20 歳のときに知っておきたかったこと』阪急コミュニケーションズ

サイエンスアゴラ 2020
<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/exhibition/>